

# 日本製陶技術の西漸 ―― 1920年代初頭におけるリーチ・ポタリーでの松林靄之助の活動を中心に

前崎 信也 (立命館大学)

イギリスのスタジオ・クラフト運動を牽引したセント・アイヴスのリーチ・ポタリー創設と聞けば、多くの方が濱田庄司 (1894-1978) の名を思い浮かべるに違いない。ポタリーの創設者であるバーナード・リーチ (1887-1979) とともに渡英し、3年半の間にロンドンで2度の個展を成功させた濱田の業績はこれまで述べられてきたとおりである。しかし、濱田の帰国後、リーチ・ポタリーのために登り窯を建造し、技術支援と生産体制の充実に専心した松林靄之助<sup>まつばやしつるのすけ</sup> (1894-1932) の功績について知る人は少ない。

本発表は、京都府宇治市の朝日焼資料館において近年発見された松林靄之助関連の新資料から、近代日本の製陶技術が西洋に伝播した過程を明らかにする試みである。この350件を数える資料は、松林が伝習生として学んだ京都陶磁器試験場関係資料、日本各地の窯業調査報告書、英国滞在時及び帰国後にバーナード・リーチをはじめとする外国人から送られた多くの書簡などを含み、日本及びイギリスの近代陶磁史上極めて重要である。これら新資料の内容と、イギリス各地に現存する関係資料の調査を行った結果、松林の2年足らずのイギリス滞在時の活動が、その後のスタジオ・ポタリー運動の発展に重要な役割を果たしていたことが明らかとなってきた。

松林靄之助は、宇治朝日焼十二代当主松林昇斎<sup>まつばやししょうさい</sup> (1865-1932) の四男で、1922年にオックスフォード大学留学を目指し渡英した。リーチの要請を受け日本式の登窯を建造する傍ら、リーチの2人の弟子、マイケル・カーデュー (1901-1983) とキャサリン・プレイデルブーヴェリー (1895-1985) に窯道具の製作や陶土の準備法などを指導した。後にこの2人は、ポタリーで技術的な指導をしてくれたのはリーチでも濱田でもなく松林だったと述べている。カーデューは独立後にイギリスはもとより、アフリカ、アメリカ、オーストラリアなどで多くの陶芸家を育てるなど、スタジオ・ポタリー運動の世界的な拡大に貢献し、プレイデルブーヴェリーはイギリスを代表する女流芸術家として活躍したが、松林が授けた日本の製陶技術は彼らの活動を通じて世界中に広がったのである。

日本各地の伝統的窯業技術は近代に急速に発展・融合したが、その中心にあったのが主に明治期に設立された工業学校や窯業試験場であった。京都陶磁器試験場の卒業生であった松林の事跡は、日本の製陶技術が大正期にはすでに世界有数の水準にあったことを証明するだけでなく、美術史上で常に問題となってきた技術・技法の伝播の問題を研究する上で非常に有効である。そこで本発表では、上記の資料を基に、松林のイギリスでの活動の詳細を明らかにするとともに、松林がポタリーに何を残し、それがその後どのような経緯を経て世界的な広がりをもたせたのかについて考察する。